

LETTER FROM COPENHAGEN  
コペンハーゲン通信 PART V  
9



デンマークのウイスキー愛好家の情熱は、オリジナルの逸品作りに向かっている



デンマーク王国 DATA

人口約570万人(≒兵庫県)、面積4.3万平方キロ(≒九州)、欧州最古の王室を有する立憲君主国。「世界一幸福度の高い国」「環境・デザイン・福祉先進国」として知られ、アンデルセン童話、食器・家具・知育玩具などのブランドは日本でも有名。

本会事務局職員が、2007年1月より在デンマーク日本大使館に出向しています。国際競争力や人々の幸福度で高い評価を受けるデンマークからの現地報告を不定期にお届けします。



山口 晃平

在デンマーク日本大使館二等書記官  
(経済同友会事務局より出向中)

## デンマークのウイスキー事情

突然ですが、私はウイスキーが大好きです。

本格的な収集家には遠く及びませんが、デンマークに来てからも少しずつ買い足し、自慢のコレクションを楽しんでいます。先日は念願だったスコットランド訪問の機会を得て、私のウイスキー熱はかつてないほど上昇しています。

残念ながら、他のウイスキー消費大国ほどデンマークでのウイスキー人気は高くありません。しかし、英国やコアなファンが多いドイツと密接な関係にあることから、品揃えはなかなか充実しており、それらの市場向けの限定ボトルもよく見かけます。また、愛好家の情熱は非常に強く、日本にも引けを取らないレベルにあると感じています。

最近の彼らの情熱は、収集よりもオリジナルのウイスキーを作ることに向かっているようで、ここ数年デンマークでは新たなウイスキー蒸留所の設立が相次ぎ、現在では国内に10件を数えるまでになっています。極めて小規模ですが、独自のこだわりを持ち、日本やスコットランドとはひと味違うエッジの効いたウイスキーを作っています。今回はそのうちの一つ、コペンハーゲン空港のすぐ近くにある「コペンハーゲン蒸留所」を紹介したいと思います。

責任者であるプリンス氏がコペンハーゲン蒸留所を設立したのは2014年12月。実験場といった雰囲気施設には、容量320リットルの小さなポットスチル(蒸留器)と、ボトリング等のための簡素な設備があるのみです。そのため、精麦・糖化・発酵といった工程は、提携するビール醸造所の設備を借りて行い、そこでできた発酵液を蒸留してウイスキーを作っています。プリンス氏は25年来の大的ウイスキー愛好家ではありますが、実は法律の専門家であり、蒸留所での勤務経験はありません。そんな彼が蒸留所

を始めるきっかけになったのは、一つのウイスキーとの出会いでした。

彼がスコットランドのアイラ島にあるブルイックラディ蒸留所を訪れた時のこと。彼は友人の、当時、同蒸留所のGMを務めていたダンカン・マクギルヴレイ氏の秘蔵のウイスキーを試飲させてもらい、「全身に衝撃が走った」と言います。それは、マクギルヴレイ氏の好みに基づいて作られた退職金代わりにウイスキーで、同蒸留所のどのウイスキーとも異なる、強い個性を持つ完全にオリジナルなものでした。プリンス氏はこの出会いにより、「好きなウイスキーを探す」のではなく「好きなウイスキーを作る」旅に出ることを決めたとのことでした。

詳細な工程や原材料、また、いただいたウイスキーのテイastingノートの内容まで踏み込むと、到底このページに収まらないので割愛しますが、少なくともスコッチウイスキーを中心に一定程度飲んできたと自負する私も、プリンス氏のウイスキーは今まで聞いたことのない製法で作られた、まったく経験したことのない味わいのウイスキーでした。まだ市場に出ておらず、リリース予定は2017年3月ごろとのこと。発売を待ちきれない方はコペンハーゲンを訪れて実際に試してみてもはどうでしょう。プリンス氏とのウイスキー談義とともに、新しい体験ができることをお約束します。

最後に現地ならではの情報を一つ。日本でウイスキー探しをするには熱心な収集家との厳しい競争を避けて通れませんが、ここデンマークでは、レアボトルが街の酒屋さんにひっそりと残っていたりします。デンマークにお越しの際には、街の酒屋さんの棚をよく見てみると、ずっと探していた一本に会える……かもしれません。